

バグなのに

— I T現場での日々の苦労を替え唄にして唄う提言—

JaSST 東京実行委員 和田憲明

あらまし I T技術者は現場で日々苦労を重ねている。I T技術者は一人で高度な作業をすることが多く、孤独を感じながら大きな責任を背負う。そんな日々の苦労を、替え唄を通して少しでも解消することを提言する。この公開資料は発表した内容に背景部分などを大幅に加筆し論文としてにまとめたものである。発表内容の大半が替え唄の歌詞を投影した動画形式であり、そのままでは公開資料として不向きのため、ご了承いただきたい。

1. はじめに

唄は世につれ、世は唄につれ。唄は人と人をつなぎ、活力を与えてくれる。唄を聴くことは趣味として多くの人が実践し、ストレス解消に役立っているが、本論文では唄を別の観点から活用することを提言する。唄を自分で作り、自分や仲間と唄うことで、より大きなストレス解消になり、仲間との一体感が深まり、その輪も広がっていく。

2. 唄を作る

唄をゼロベースから作ることは困難である。音楽の才能も必要となる。もちろん趣味として自由に唄を作ってみてもよいが、気持ちよく歌えるメロディーを作るのは時間がかかり、完成度を高めるために相当の努力も必要である。そこで「ヒット曲の替え唄」に着目する。ヒット曲は多くの人が知っており、唄いやすい。

まずテーマを決める。今回はテスト技術者の悲哀をテーマにした。次は、自分が日々経験している苦労、過去に経験した苦労をつらつらと思い浮かべる。

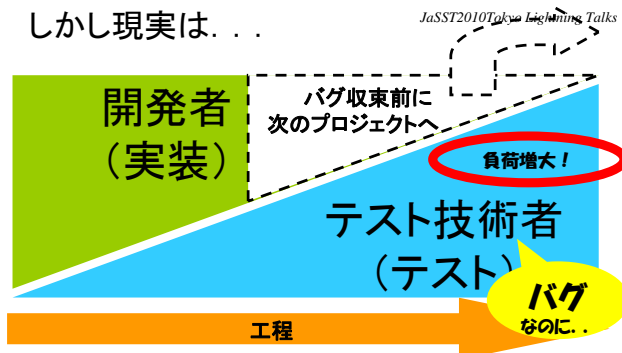
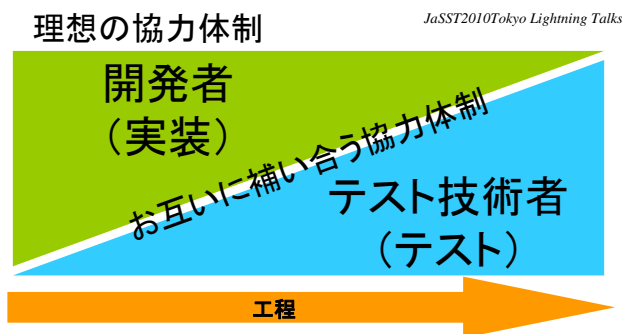
聴き、タイトルとサビの部分に意識を集中して、言葉を少しずつ変えてみる。タイトルとサビの部分をもっと替えることができたなら、次は他の部分を少しずつ替えていく。この過程が一番楽しい。なるべく原文の言葉が多く残るよう心がける。その方が気持ちよく唄える。

3. 唄う

柏原よしえさんの 1983 年のヒット曲「春なのに」を原曲として使用した。原文の一語一語を残しつつ、自分が体験した悲哀を盛り込めた傑作と自負している。

さて、唄う前に準備をする。日々苦労した思い出深い場所（地名、駅名）を2つ用意していただきたい。ちなみに私は第二位が「京急蒲田」で、第一位が「新高円寺」である。発表では会場のみなさんもいっしょに唄っていただいた。ちなみに2番はドラ娘さんに熱唱していただいた（とても感謝している）。

「バグなのに」 ～テスト技術者の悲哀～



開発だけが仕事でしょうか
テストよろしくと仕様書だして
「さみしくなるよ」それだけですか
次のプロジェクト呼んでますね
流れるソースたちをバグゼロでおくりたいけれど
バグなのに お別れですか
バグなのに涙がこぼれます
バグなのに バグなのに
溜池山王の夜

徹夜しても狭い仮眠室
今まで通りに会えますねと
君の頑張りはずごかったよと
言われるまでは辞める気でした
(*1)記念にくださいモジュールひとつ
青い画面で落とします
バグなのに バグなのに
〇〇の夜 (上記で準備した地名を入れる)
(*1以下を繰り返す)

参考文献

- [1] 「春なのに」1983年
作詞作曲：中島みゆき 唄：柏原よしえ

重要なことは「自分自身が体験したこと」を取り上げることである。見聞きしたことでは歌詞に感情が乗らず、聞いている人にも響かない。

その体験を頭に入れながら、いろいろなヒット曲を